後期：現代キリスト教思想研究２――現代あるいはポストモダン

オリエンテーション＋研究発表

１．解釈学的神学と現代思想

２．政治神学１――シュミットとモルトマン

３．解放の神学１――フェミニスト神学１

４．解放の神学２――フェミニスト神学２

５．政治神学２――アガンベン

６．政治神学３――ジジェク

７．研究発表　　８．研究発表　　９．研究発表

１０．解放の神学３――黒人神学

１１．解放の神学４――アジア

１２．宗教の神学とヒック

１３．エコロジーの神学

＜前回＞宗教の神学とヒック

（１）宗教の神学

１．宗教的多元性（複数性）と宗教多元主義：古い問題と新しい問題

２．近代的問題状況：人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教

３．宗教的多元性と教派的多元性→エキュメニズム

４．現実：対立・相克（戦争）、民族・経済・政治の状況下での宗教

５．多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論

・啓示論、救済論、歴史神学→土着化論

・宗教類型論から価値判断へ：排他主義、包括主義、多元主義

６．諸テーマ（問題群）：戦争と平和（戦争論・平和論）、宗教間対話（対話論）、寛容（宗教的寛容論・信教の自由・政教分離）

（２）ヒックと英語圏の宗教哲学

（３）ヒック宗教哲学の基本構想

Ａ．宗教概念

宗教史・宗教現象→基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換

ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性

Ｂ．宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論

自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、

宇宙的楽観主義、還元主義批判

神の存在論証と悪論・神義論、宗教言語論→宗教的実在論

Ｃ．宗教的多元性：宗教的状況の現代

多元性と実在→ the Real、キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

（４）宗教言語と宗教的実在論

１．『人はいかにして神に出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館

・The principle of critical trust

There exists at present a living human body, which is *my* body.

The earth has existed also for many years before my body was born.

・Experiencing as interpreting / critical realism

・素朴実在論、観念論、批判的実在論。

２．*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press,

1989.、Religion and Reality（pp.172-189）、religious realism
３．宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる（Ｂ）。
宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。
＋
宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題（Ｃ）。
↓
この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか（宗教とは何か＝Ａ）。
４．こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

１３．エコロジーの神学

（1）キリスト教思想と環境論

芦名定道・ブログ「自然神学・環境・経済」（http://logosoffice.blog90.fc2.com/）
１．環境倫理の諸問題と平等の原理：自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義
２．リン・ホワイトの問題提起：聖書は人間中心主義か？
「地の支配」とは？　→　論争：パスモア、モルトマン、リートケ
３．支配と王権イメージ
暴君的な専制君主（王は地上における神の代理）、諸部族の調停者（首位の貴族）
４．人間の固有の使命としての支配、「地の僕」との相捕性　→　人間は何者か？
エデンの園の管理者・園丁、種の間の利害の調停者
５．「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
カインとアベルの対立そして殺人、ノアの洪水
人間と自然との連帯性（グローバル化の意味）
６．自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異
７．自然との共生のための前提
・欲望のコントロール（欲望の無制限の肯定でも、欲望の完全否定でもなく）
理論だけでなく、感性が問われている。
・正義と対話の精神　→　正義の基準自体が「対話」において明らかにされる。
・共に生きる世界のヴィジョンの共有　→　希望の組織化（髙木仁三郎『市民科学者として生きる』岩波新書）

＜創世記１＞27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

＜創世記２＞7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。
15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。

＜創世記９＞9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

＜サムエル上　８＞4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、5

彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。

＜イザヤ１１＞6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

（２）エコロジー神学――韓国の場合

A. 韓国キリスト教における環境運動

・柳美浩(ユ・ミホ、キリスト教環境運動連帯政策室長)

「被造物と共なるキリスト教環境運動の25年」(『**現代生態神学者の神学と倫理**』大韓キリスト　教書会、2006年、pp. 351-382)。 洪伊杓訳

1. はじめに

「今日、地球は過剰人口、環境汚染、資源枯渇、そして自然に対する無分別な破壊などにより危機に迫っている。人類が生き残ることができるのか、それとも滅亡するのか、という問題を越えて神が創ったすべての被造物、すなわち生態系全体の生存が脅威にさらされている。このような危機の根底には、人間の自然に対する略奪的関係が深く敷かれている。これまで人間は自然を人間の便利さを増すためにのみ有効なものとして、それが人間に利益を与える時にだけ保護されなければならないと考えてきた。

幸い、最近になり自然に対する人間の態度が生態的観点から新しく認識されなければならないという論議が活発に進められている。自然に対する態度が人間は勿論、他の存在にまでも致命的な脅威を与え、この克服は人間が生態系の中の一部であることを悟らせ、生の態度を転換することによってのみ可能だという事実を認識させた。キリスト教も同様にこれに対する神学的あるいは信仰的代案を摸索している。」

２．キリスト教環境運動の理論的背景

(1)キリスト教的観点から見る原因分析

「これまで人間は産業化と文明という名の下におびただしい自然破壊を行って来た。自然に対する無分別な開発は直接的に自然を破壊し、人間の歪曲された自然理解、人間中心主義、物質中心主義、そして科学技術に対する盲信などは自然破壊をより正当化しながら助長してきた。これを神学的な観点から見る時、何より神と人間の関係、人間と被造世界の関係が破壊されたため発生した現象であると言える。」

「「生態的危機」の他の要因は物質中心主義にある。現代社会の特徴を単純化すれば物質、つまり「お金」が支配する社会と言える。現代はこの物質を中心とする価値観が極限に達し、内面的価値よりは外面的な物質中心的価値がむしろ人間を規定し、人間を縛る。人々は物質を消費し、自我を実現しているとの錯覚を起こしている。」

「結局、今日の生態的危機は、神中心の生を生きることなく、「人間」と「物質(お金)」と「科学技術」を中心にみなす偶像崇拝行為から始まったと言える。」

(2)信仰的根拠

(3) 神学的背景

「世界のキリスト教界と世界の神学が生態的問題を信仰的関心と神学的思惟の対象にする

ようになったのは 1960 年代からであるが、公式に生態的危機状況に対する問題を創造信仰と関連させ神学的課題として論じ始めたのは 1975 年ナイロビ(Nairobi)で開かれた「世界教会協議会」(WCC)第 5 次総会であった。続いて 1983 年バンクーバー(Bancouver)で開かれた第 6 次総会は「イエス・キリスト、世の生命」(Jesus Christ- the Life of the World)という主題の下、本格的にこの問題を神学的討論の場に持ち出し「創造秩序の保全」という実践的課題を設定した。1989 年にソウルで開かれた「世界改革教会連盟」(WARC)総会では「創造の保全」(Integrity of Creation)を総会の主題の一つとして採択し、1990 年にソウルで開催された「世界教会協議会」主催の世界大会でも「正義、平和と創造秩序の保全」(Justice, Peace, Integrity of Creation, JPIC)を今日キリスト教の最優先課題として明らかにした。また 1991 年、キャンベラ(Canberra)第 7 次総会は「聖霊よ、来てください、万物を新しくしてください」(Come, Holy Spirit-Renew the Whole Creation)という主題の下に集まり、世界教会が実践しなければならない具体的行動指針を打ち出した。そして、1994 年には教会内外の生命現象に関わるさまざまな作業をより体系化するため「生命神学」プログラムを始めるのに至った。生命神学は進歩と平等性という地球的価値に「生の質」、または「持続可能性」という価値をもう一つ付加することとなった。生命神学と言うのは、社会正義と平和と創造の保全すべてを包含する神学である。

このような世界教会の動きは、国内にも生態的関心を神学的主題として扱うことによりキリスト教環境運動を具体化する実践的背景になった。1970 年代、徐南同教授(延世大学)の生態学的神学論の胎動以後、1980 年代後半、1990 年代に入ってから神学の各分野で活発に展開され多様な環境論議はキリスト教環境運動に大きな活力になった。」

3. キリスト教環境運動の現況と歴史

(1)教会の環境運動

1)エキュメニカル機構

ア. 教団協議体

「「韓国キリスト教教会協議会」(以下 KNCC)は、1991 年 4 月「生命保全のための私たちの告白」という宣言文を発表し、相次いで環境委員会を組織してこれまでに８会員教団らと協力しながら環境運動を展開してきた。1992 年には、世界環境の日を記念しながら「韓国教会環境研究所」(現、キリスト教環境運動連帯)と当時 KNCC に加入していた 6 教団が共同で「環境主日」を設けた。こうして KNCC 加盟教団全体の環境運動が始まった。以後「環境宣教政策協議会」を開催し、運動の方向性と課題を決定してゆくことができるように助言するだけではなく、毎年環境主日を守りながら礼拝資料集を発刊すると同時に寧越郡の「東江」など「地域環境運動」の現場に訪れ「環境主日連合礼拝」を守った。一方、1996 年には「環境宣教協議会」を発足してより積極的な運動を試みたりしたが、その後解体されそれ以降は、「キリスト教環境運動連帯」と共同で韓国教会の環境運動を支援している。また、「韓国キリスト教総連合会」(韓基総)も 1992 年から「環境保全委員会」を「常設委員会」として置き、「環境主日礼拝」を守り、多様な主題を持ってセミナーなど「生活実践運動」を展開している。」

イ.教会女性協議体

2) 各教団の環境運動の現況

ア. キリスト教大韓監理会(KMC)

「1990 年 6 月に「宣教局社会宣教部」の中に「環境宣教委員会」が組職され、その時から教団次元の環境運動が始まった。1991 年には「社会宣教政策協議会」において「環境を保全する 60 種生活守則」を作成し教育資料を通じて会員教会に伝達し実践を導き出すために力をつくした。また、1992 年には「環境主日」を 6 月第二週に決め、KNCC と協力して関連資料を作成、発送した。

ここで力を入れたのは、1993 年に監理教会の総会で採択された「社会信経」である。その内容を見ると「私たちは万物を善く創造され、自由にされ完成される聖父、 聖子、聖霊の三位一体である神を信じ､この地において神の国事業に参与するよう呼ばれている。(中略)私たちは創造世界を保全し完成させる仕事の先頭に立ち、今日の生態界の危機を全人類とともに克服しなければならないという使命がある」としている。さらに、1995 年環境宣教政策協議会で神学的、宣教的、牧会的実践方案を討論した後発表した「環境宣教のための決議文」は、所属教団の牧師たちが生態的危機の中で環境宣教方案を講究するために寄与した。

このような運動が教団内「神学紛争」(1992 年の宗教多元主義とポスト・モダン神学に対する宗教裁判事件-訳者註)などの影響で、1995 年に「社会宣教部」がなくなり大きく萎縮してから、1998 年「社会宣教部」が新しく新設され、2001 年に入り「地域環境運動」の実務者と学者、そして関心ある一般牧師たちが中心になって「環境宣教委員会」が再組織され、運動が活性化していった。」

イ. 大韓イエス教長老会(統合)、ウ. 韓国キリスト教長老会、エ.その他の教団

3）各個教会の環境運動の現況

ア. 全般的な現況

「「キリスト教環境運動連帯」が 1999 年に実施した「教会の環境実践に対する調査」によれば、すでに多くの教会が環境運動に関心を持ち、多様な実践を展開している。ただ、調査対象になった 240 余の教会の中で 100 余が「キリスト教環境運動連帯」の会員だった点を考慮すると、全体教会の平均的な現況を語ることは困難あるものの、教会が全国に分布しており、これらの教会が地域社会に影響を及ぼしていることを考えると意味ある調査であると言えるだろう。

まず、調査に参加した教会は環境運動を実践したことがあるかという質問に対して 89.3%がある、と回答している。このような高い数値は大部分の韓国教会が環境問題に対して最小限の関心を持っているということを語っている。しかし、このような関心を組職化し維持してゆくためには次の質問結果が表すのように多くの問題点がある。まず教会に環境運動を実践している部署があるのかという質問に対して 32.5%がある、と答えた。部署の名前は「環境(宣教)部」、「環境活動部」、「環境節制部」、「環境宣教団」、「環境委員会」、「敬虔節制委員会」、「環境と生命を生かす場」、「生命村作り運動」、「環境指導者班」など多様であった。会員教会を除けばその数値はもっと低くなる。しかし、少なからぬ教会に「環境担当部署」があるという事実はこれまでの教団と環境運動団体の運動の成果であると評価することができる。調査対象の 50%以上が礼拝堂内部の行き過ぎた装飾や、高価な設備設置を廃止し、家庭での環境実践を強調し、37%の教会が環境問題を念頭に置いた聖書勉強を試みていると回答した。大部分の教会が使い捨て用品を控え不必要な印刷を控えていると回答した。また、66.3%の教会が周辺地域の環境問題を認識しており、周辺の環境団体と連帯してその問題を解決する意思があると 55%の教会が回答している。しかし、実際に地域社会と連帯して実践している教会は 8.3%にとどまっている。

実際に教会で成り立つ環境運動は、「ごみ分別収去」と「リサイクル」、「環境説教」、「再生せっけん製作及び普及」、「環境教育」、「有機農産物の直去来」などが主軸を成しており、地域社会の問題を解決する環境運動は不十分である。教会の垣根を崩して動植物が共存する空間として作ろうとする努力をしているかという質問に、大部分の教会が行っていないと回答した。 言い換えれば、積極的な次元での環境運動は、まだ各個教会の次元で試みられておらず、相変らず環境運動団体や教団の範囲にとどまっていると言える。」

イ. 実践の事例

「多様な環境運動をしている教会は多くあるが、1999 年以後実施された「キリスト教環

境賞」を受賞、あるいは「緑色教会(緑の教会)」として選定された教会ば次の通りである。

釜山の「金谷聖門教会」は教会員たちが一つになり、地域住民とともに、金谷、華明地域焼却場建設反対運動を展開し、釜山広域市での焼却場建立を放棄し、リサイクル政策などごみ対策を積極的に模索するよう促した。このような各個教会の実践はたとえ少数とはいえ、大邱、蔚山、寧越、太白など環境問題の現場で活動している教会の力は組織的でその影響力は大きく作用している。」

(2) 団体の環境運動

1)キリスト教環境団体

ア.キリスト教環境運動連帯(附設社団法人韓国教会環境研究所)

イ. 仁川の「仁川環境宣教会」と「生命平和キリスト連帯」

「「環境宣教会」は 1994 年 11 月、超教派的に創立された。初期には「民衆医療宣教」に関心を持って活動した「平和医院」において環境宣教を担当する実務者を派遣し会誌を発刊するなど活気に満ちていたが、実務者が辞退した後、この活動は縮小され環境宣教に関心を持つ牧師を中心に運営され始めた。仁川には監理教会が多数あり、監理教会を中心にした牧師たちが参加している。毎年「環境讃美祭」や「環境写真展示会」などを通して教会員の環境に対する関心を誘発させ、キリスト者の環境意識と実践の調査を実施した。また「環境教室」と「環境探査紀行」を開き教育を受けた人々を中心に「敬虔と節制-生活信仰運動」を推進したが、現在活動が小康状態となっている。

一方 2005 年からは、新自由主義の市場経済下で貧富の格差、戦争の葛藤が深刻化するにあたり、仁川地域のキリスト者と教会が平和と生命的生を定着させるため「生命平和キリスト連帯」を組織し教育訓練及び多様な運動を計画、 実践している。」

ウ. 太白鉱山地域環境研究所、エ.光州・全南のキリスト教環境運動連帯

オ.咸陽のキリスト教環境運動連帯、カ. 大邱のキリスト生命連帯

キ. 釜山のキリスト教生命運動連帯、ク. 生命を守る「キリスト環境連帯」と「全北生命平和キリスト人連帯連帯」、ケ. キリスト教生命倫理委員会

2)地域-教会の連合運動

神の創造世界を保全し地域社会を保護することが教会の本来の業であることを告白し、地域教会の運動において先頭にたっているものをいくつか紹介する

ア.京畿道華城市の「染料-顔料工団造成」反対、イ.掘業島の核廃棄場建設反対

ウ. 寧越郡の「東江ダム建設」反対、エ. 釜山の「金谷洞焼却場建設」反対

3)キリスト教市民団体

ア. キリスト教青年医療人会

「1987 年に始められたこの団体のメンバーは、キリスト学生会に所属していた大学生時代以来、無料診療や農村活動を行った地域に病院を建て住民たちと行動をともにしている。1988 年、営利を目的にしない純粋な目的で平和医院が建てられ、新しい医療秩序を夢見る代案的医療共同体である「医療生活協同組合」へと発展していった(安城医療生活協同組合、安城医院)。 現在、約 100 余名の会員が「聖書研究委員会」と「環境生命委員会」、「地域医療委員会」などを設置し活動している。環境委員会では創造秩序保全のためにセミナーはもちろん、ダイオキシン被害の現況に関する国際ワークショップを開くなど環境問題にも絶え間ない関心を持ってきた。また、1990 年代初めには、韓国の「枯葉剤被害者たち」の医療相談をしてからベトナム戦争の枯葉剤被害地域を直接訪問し診療するなど枯葉剤問題に深く関与して来た。」

イ.キリスト教倫理実践運動、ウ. キリスト女民会、エ. キリスト教社会問題研究院

4) キリスト教精神を基礎にした社会団体

ア. 対話文化アカデミー (旧クリスチャンアカデミー)、イ.キリスト教青年会(YMCA)、

ウ.女子キリスト教青年会（YWCA）

5)生活協同組合及び共同体運動

4. 分析と評価

(1)時代別特徴による分析

1)1970-80 年代　　2）1990 年代　3)1998 年以降、現在(2005)まで

(2）運動動機による分析

運動の動機は大きく二つに分けることができる。運動の初期に主に現われたのは、対応的動機と言える。これは地域社会で起きる環境汚染などの問題を解決する次元で起きたものである。もう一つは信仰的な動機と言えるが、それはキリスト者が当然生きるべき生の姿という次元で起きる環境親和的な生き方にほかならない。この二つが明確に二分され得ない状況もあるが、キリスト教環境運動を理解するためには区別して考えることも必要だろう。

1）対応的動機

「地域教会の連合運動という章で列挙された環境イシューによる運動がその例である。実際、キリスト教環境運動がこのような対応的動機から始まったことは明らかである。1980 年代に入り進められた工業化と資本主義による多くの病弊たちを治すことが今この時代すべての人々の共通の課題であり、そのため各地で環境運動がはじめられ、このような中からキリスト教環境運動も開始されたのである。」

2）信仰的動機

「「大韓イエス教長老会」（統合）の「敬虔節制運動」、「生命を生かす運動 10 年」、「韓国キリスト教長老会(基長)」の「生命文化創造運動」などが代表的な組織で、緊急課題を優先するよりは、敬虔、節制、生命のような包括的で高い理想を追求する動機からはじまった運動である。農村での「生命農法」や「共同体運動」、「霊性追求運動」などもこれにあたる。」

(3）評価

5. あとがき

「キリスト教環境運動は、1970-80 年代の播種期を経て今日に至るまで、教会とこの世に根を降ろして来た。これまでの活動をもとに信仰と実践を深化させよう。それによって、私たちは、神に喜ばれ、より大きな業ができる能力と権勢を得ることができるであろう。もちろん、私たちができる業は、環境破壊の範囲が全地球的に拡がっている状況において非常に些細なことである。しかし、神は環境を生かすため私たちの小さな実践をも大きく見てくださる。」

B. 韓国におけるエコロジー神学の展開

・金敬宰（キム・ギョンジェ）「気候崩壊と神学的応答 ： 去る25年の韓国神学界の自然-エコロジー神学探求の地形図と今日の課題」(**『2009地球の日記念 ―気候崩壊と神学的応答―　エコロジー神学セミナー資料集』**韓国教会環境研究所、 梨花女大脱境界人文学研究団、2009年4月23日、pp. 36-56.)。洪伊杓訳

1.はじめに

「本論文は「気候崩壊と信仰的応答」というテーマで集う今回のセミナーで、過去 25 年間の韓国神学界の動向において、特に自然・エコロジー神学的議論の推移がどのように展開されて来たのかを組織神学の分野を中心に考察し、今後の課題を提示しようとするものである。」

「本論文の目的は、自然・生態系破壊の深刻な現況を改めて紹介したり、専門家の見解を伝えたりすることではない。今日全世界の政治、経済、社会、文化、そして遂に神学分野

においても「正義があり、持続可能な人類社会」を可能にするためにはどのような知恵と実践が必要なのかを論じる中で、世界キリスト教界の動向と特に韓国神学界の動向を総体的に把握することがめざされる。韓国の組織神学分野で自然・エコロジー神学の地形図、あるいは海流分布図を作成し、より効果的な自然・エコロジー神学的な運動の持続的発展のための自己省察することに、本論文の焦点は合わされている。この目的を果たすために、次の通りいくつかの分野を多少細密に分けて考察してみることにする。

(i) 西欧の自然・エコロジー神学の台頭と韓国神学界への紹介
(ii) 自然神学及びエコロジー神学の哲学的・神学的基礎としてプロセス思想の影響
(iii) 世界の神学界におけるエコ・フェミニズム神学の台頭と韓国キリスト教の応答
(iv) 韓国キリスト者の自然・エコロジー神学的議論
(v) 韓国教会の課題」

2. 自然・エコロジー神学への神学的パラダイムの転換と韓国神学界への紹介

「1980 年代、世界の神学界では重要な動向として第 3 世界神学運動である解放の神学・民衆神学・フェミニスト神学・ペンテコステ神学運動が 1970 年代に引き続き関心を集めたが、アメリカでは、新約学界における、ジョン・ドミニック・クロッサン(John Dominic Crossan)とロバート・ファンク(Robert Walter Funk)が主導した「キリスト・セミナー」運動と綺羅星のごとく世界的フェミニスト神学者の活動が目立った「フェミニスト神学運動」、そして第２次バチカン公会議以後の宗教間の対話と協力を問題にする「宗教文化神学」が存在している。

しかし、西欧神学の本場と言えるヨーロッパ神学界において、1980 年代に特に組織神学部門で静かな革命が起き、その結実の代表的作品としてモルトマン(Jurgen Moltmann)の『創造における神――生態論的創造論(Gott in der Schopfung. Okologische Schopfungslehre)』(Moltmann, 1985)が挙げられるが、神学史において象徴的なものとして重要視されている。この本の副題が『生態学的創造論』であったことはさまざまな意味を持つ。」

「しかし、このようなヨーロッパ神学界の動向の変化が韓国神学界全般と韓国キリスト教界にどれほど反映され 創造的牧会活動にまで影響を及ぼしたのか、それに対しては非常に否定的判断を下さざるを得ない。カルヴィニズム(Calvinism)が強いという韓国キリスト教界ではモルトマンがカルヴァンの次のような言葉の引用をしても既存の態度に変化を与えることはできなかった。「聖霊はどこにでも臨在してすべてのものを維持して養育しながら生かす」(Institutio. I. 13.14.)。

韓国の改革派の教会神学と教会において、聖霊の活動領域は主に聖書と教会の中で活動する霊として制限されている。救済論は相変らず個人の霊魂が天国に入ることと理解され、自然は人間による支配と活用のための贈り物として理解され説教されている。モルトマンの終末論は創造世界の大破局的廃棄を語らず、歴史と自然の新しい変革と変化にあることを強調したが、韓国教会の中でモルトマンを招待した純福音教会牧師たちと信徒たちは、彼の見解と関係のない宇宙的大破滅を強調する正統的終末論を放棄しない姿勢を示している。」

「世界の神学界はモルトマンの 1980 年代以後出版された神学的傾向よりさらに先に進んでいるのだが、韓国キリスト教会の大部分の指導者たちは、モルトマンの神学的立場さえ受け入れず、神学的には 1950 年代レベルから変わらない神学的怠慢と牧会的欺満を続けている。」

3. 自然・エコロジー神学発展の基盤としてプロセス思想が現代神学に及ぼした影響

「確かに 20 世紀後半期の 1960 年をターニング・ポイントにして、20 世紀前半と後半とでは神学的雰囲気は確実に変わった。」

「20 世紀後半期は文化精神史的な面から見ると、いわゆる「ポストモダン時代」である。生と思惟体系において、多様性、差異と個性が尊重され、変化と生成の強調される時代、また相対性と曖昧性を耐える存在への勇気、実体論的実在観に対する関係論的実在観、一方的な情報やコミュニケーションではない双方向的なコミュニケーションと参与が強調される時代である。このような時代の文明史的流れの中で、神と創造世界との関係、自然と人間との関係を解き明かすのにあたって、「プロセス思想」と呼ばれれるホワイトヘッド（Alfred North Whitehead, 1861-1947）のプロセス哲学（process philosophy）やテイヤール・ド・シャルダン（Teilhard de Chardin, 1881-1955）の進化論的宇宙的キリスト論が、神学界に大きな影響を直接的あるいは間接的に及ぼすようになった。

前述したヨーロッパの正統神学の系譜を継承したモルトマンの後期組織神学の著書の中にもプロセス思想的要素は多く受け入れられ、特にエコ・フェミニズム神学者らの重要な著書にはプロセス思想の影響が圧倒的というほど大きく影響している。」

「ところで、問題はモルトマンの 1980 年代後半期の神学著書が韓国キリスト教界一般に充分に受け入れられず，かつ牧会現場では大部分保守的な教会指導者によって異端的新神学運動であるかのように扱われいることであり、プロセス思想が韓国神学界や牧会現場に根付くにはまだ一世代（30 年）以上の歳月が必要なのかもしれない。それほど行く道は遠いが、日はもう暮れようとしており、自然生態系危機を克服するためには神学的な考え方の根本的な変化が伴わなければならない。しかしそれにもかかわらず、韓国キリスト教界を支配する一般的傾向は 17 世紀のプロテスタント正統主義であるという現実を直視しなければならない。なによりも、変化する世界的神学傾向、特にプロテスタント神学の発達を拒否するように韓国キリスト教界を束縛している鎖は、根本主義神学の影響を受けた聖書無誤霊感説であり、誤った聖書に対する直解的権威主義である。」

4. 世界の神学界におけるエコ･フェミニズム神学の台頭と韓国キリスト教の応答

「1980 年代以後、世界の神学界の創造的な活動の中でエコ・フェミニスト神学の台頭は神学史においておそらく最も重要な事件として評価されなければならないだろう。「エコ・フェミニスト神学」（Ecofemisist Theology）という語彙自体は、その分野に携わる女性神学者たち、進歩的教会女性運動家、生態環境運動家、そして一部の進歩的男性神学者グループのほかでは流行の神学の中の一つを指摘する語彙であったり、語彙の内包する意味が明らかでないまま、曖昧な概念として広がてい可能性が高い。」

なぜなら、その用語自体が「生態学・女性学・神学」という三種類の学問の総称的表現であり、「生態学」を理解しようとすれば地質学、古生物学、気象学、生物学など専門分野

「今日の主題と関連して、ここで私たちは綺羅星のごとき外国のエコ・フェミニストの中で、ローズマリー・R.リューサー（Rosemary Radford Ruether）とサリー・マクフェイグ（Sallie McFague）という二人の学者の見解を一瞥し、その思想が韓国キリスト教に及ぼしている影響と応答を論じようと思う。この二人の学者を選ぶ理由は、二人が共に組織神学者としてフェミニスト神学を研究する者であり、彼女らの重要な著述の一部が韓国語に翻訳され、韓国フェミニスト神学者が深く研究しているからである。

R.リューサーと S.マクフェイグ、この二人は、伝統的キリスト教神学の問題点、特に神論の問題点を指摘し今日の地球の生態系危機の発端と加速化に直説また間接的な責任が正統キリスト教にあることを認めている。しかし、二人は依然としてキリスト教組織神学者でありつつフェミニスト神学者であるため､キリスト教信仰と神学の源である二つの伝統、すなわち「契約的伝統」と「聖礼典的伝統」に注目し再解釈しなければならないものとしてみなしている。この二つの伝統は相互補完的だが、リューサーのエコ・フェミニスト神学では「契約的伝統」の重要さがより強調され、マクフェイグのエコ・フェミニスト神学では「聖礼典的伝統」がより強調されているとの感じを受ける。」

「金愛英が分析しているように、既存の超越的唯一神論を批判的に克服しようとするリューサーの神論は、超越神論と汎神論を同時に「肯定/否定」(Yes/No)しながら第 3 の神論を提示する万有在神論(panentheism)である。万有在神論は概してプロセス神学者たちの神論であるが、特にホワイトヘッドのプロセス的実在観によると、実体論的個体が先行した後それらの間に関係が成立するのではなく、関係性の躍動的力と構造(How)が個体の本質(What)を構成し、存在するすべての現実存在は外面的関係を結ぶのではなく内面的関係性を持つ。フェミニスト神学者である金愛英はリューサーのプロセス神学的万有神論と創造の根源的善・美・祝福を強調しようとするジョージ・フォックス(George Fox, 1624-1691)の根源的祝福(original blessing)の神学とを非正統的キリスト教神学であると判断し、特にリューサーの万有神論的思惟体系を「実践的折衷主義と混合主義的様相」として規定している。」

「「神の超越性と絶対他者的主体性」を強調するカール・バルトの神学に自身の神学的基盤を置いている金愛英の R.リューサーの万有在神論に対する否定的批判は、それなりに尊重されなければならないが、論者は金愛英の否定的判断に同意することはできない。聖書が証言する神の神秘を有神論、理神論、汎神論、一神論、唯一神論、万有在神論などのどれかの範疇に入れることはできないが、神学が神に対する不完全な隠喩的議論であるならば、現代文明の中で生きて行く人間の生の体験は「万有在神論」が最も適合性を持つという事実を否定することは困難である。」

「21 世紀のエコ・フェミニスト神学者の中で、サリー・マクフェイグ(S. McFague)は神学的基盤を最初、カール・バルトの超越的絶対他者として神の啓示神学に置いたが、それを越えて今日人類の核心的争点である生態学的危機状況を神学的に解き明かし、その対策を提示しようとしている。

マクフェイグの神学的方法論は『隠喩神学』(1982)として現わされ、エコロジー神学は『気候変化と神学の再構成』(2008)として現わされた。具ミジョンの適切な分析と解説にあるように、マクフェイグの「隠喩神学」はキリスト教神学のすべての議論に対して聖書的直解主義と特定の神学体系を絶対化しようとする偶像崇拝に陥らないよう警告し、安全装置の役割を果たしてくれる。有限なものを無限なものとし、相対的であることを絶対的であることとして偶像化しようとするすべての試みに批判的に抵抗する「プロテスタント原理」(Paul Tillich)を忠実に堅持しながら「宗教言語の偶像化」に対して最も強く警告する。」

「上記のように隠喩論的神学方法論、あるいは認識論的問題と同時に、マクフェイグは最近の著書『神学に対する新しい思潮(New Climate for Theology)』において神学者と牧師は気候崩壊の危機的状況の中で、根本的な二つの核心教理を解体させ再構成しなければならないと考えるが、その一つは、世界との関係性の中で「神は誰か」という問題であり、もう一つは、有機体的自然・生態システムの中で「人はだれか」という問題である。キリスト教の神論と人間学の再構成が今の時代の神学的・信仰的な最大の話題であるということにほかならない。」

5. 韓国キリスト者の自然・エコロジー神学的談論とキリスト教環境団体の実践

(1) 神学界外での自然・エコロジー神学的証言

(2) 韓国プロテスタント神学界における自然・エコロジー・科学神学的議論

(3) 韓国教会の自然・エコロジー神学的課題

この論文の最後に、韓国社会で自然環境保護と生態系保存、特に気候崩壊に憂いを感じぜざるを得ない緊急な時代状況の中で、教会の課題とは何なのかを考えてみたい。

(i) 韓国教会において自然・生態系危機状況に対するより積極的で能動的な対応をできないようにしている最大の原因が逐語聖書霊感説を信奉する経典偶像化と正統教理及び正統神学体系の絶対化にあることを直視し、聖書解釈学的批判に信徒たちを積極的に触れさ

せなければならない。

（ii）韓国教会において、宗教と科学の出会いのモデルとして、相互排他的な葛藤モデルや 不干渉・独立モデルを止揚し、相補的対話モデルへの転換を急がなければならない。具体的に、進化論と創造信仰の間の不必要な葛藤関係を和解させ、生命体の「進化の事実自体」と進化原因糾明を明らかにする進化理論を区別するよう信徒たちに熟知させなければならない。言い替えるならば、進化論を受容することは直ちに無神論を受容するになるとか唯物論的還元主義へ帰属することになるとかといった考えから信徒たちを解放しなければならない。

（iii）自然・生態危機を前にして最も重要な根本的霊的目覚め（悟り）の出来事へと覚醒しなければならない。言い替えれば、すべてのものが相互関係を結んでおり相互依存的な仕方で生態学的統一性と有機体的一身体を形成しているという徹底的覚醒を内面化しなければならない。人間と自然の相互関係性は「見張り役モデル」を克服し「中枢神経系モデル」への転換を促し、創造主である神と創造世界の関係性は生命の霊である聖霊の力と愛の中で、神の超越性・内在性・創造的過程が逆説的にすべてを貫く万有在神論（panentheism）に対して（エペソ人への手紙 4:6）受容的態度を堅持するように教育しなければならない。

（iv）自然・生態神学と環境運動を広げるにあって聖書に収められた二つ貴重な伝統、すなわち正義と貧しい者への配慮を優先する「契約的伝統」と受肉的な「からだの霊性」を強調する「聖礼典的伝統」を同時に保存する。生命・平和・正義、あるいは JPIC を同時に満たす自発的清貧の回心運動と自然・生態系を破壊する既得権者たちの開発論理に対する政治社会的抵抗と市民連帯闘争を並行して進めねばならない。

（v）宗教の一次的な感情は、被造世界に対する驚異感・自分が存在するということに対する驚異・神のうちに生き、すべての生命あることを通じて生きているという感謝・そして自然の限りない豊かさと多様さと調和と美しさに対する讃美である。この感情の回復が生態学的霊性の端緒になる。聖書の自然・生態的聖句に対する新しい再解釈が求められる（創世記 1:2; ホセア書 2:18-21 ; 詩編 90、103、104、139 編 ; ロ―マ人への手紙 8:18-23 ; 使徒行伝 17: 24-29 ; エペソ人への手紙 4:6 ; コロサイ人への手紙 1:15-20）。

（vi）キリストの福音は「神の国」の実現にその本来の焦点があり、決してキリスト教の王国の拡張やキリスト教の教勢成長にはない。現在の韓国教会を主導する大型教会指向的宣教・牧会神学は、19-20 世紀西欧企業体の事業拡張の宗教的模倣と古典経済主義に符合する形態であるにすぎない。自然生態親和的になることができず、生態学的霊性涵養に衝突と葛藤を引き起こす個教会及びキリスト教宗教の無限成長神話と「支配して栄光を受ける創大信仰」を強調する祝福至上主義の宣教・牧会神学を改革しなければならない。「十字軍的霊性」（crusade spirituality）ではなく「十字架の霊性」（crucifix spirituality）へと転換しなければならない。

（vii）自然・生態系の危機状況を知らせ生態学的霊性と倫理意識を鼓吹させ、その実践を督励するために教会組織部署の中に「生態環境委員会」（仮称）を設置しキリスト教環境運動連帯と実践的連帯活動を強化しなければならない。教役者養成課程の神学カリキュラム運営においても自然・生態神学科目を必須に履修するようになるだろう。

（viii）生存競争・弱肉強食・適者生存を強調する 19 世紀の進化論的社会学を創造世界の根本秩序として前提する現政府（李明博政府）の教育哲学を批判し、共生・共進化・弱者への配慮的生が聖書的創造秩序であることを強調しなければならない。「緑色経済成長論」という包装紙を被せながら、結局は韓国の山河と自然を破壊し経済優先論理に近付こうとする現政府の無謀な自然生態破壊的な国土開発政策をキリスト教の自然・生態神学的信仰告白の立場から反対して阻止しなければならない。

（ix）キリスト教の自然・生態環境運動をさらに教会の宣教的使命における核心的課題として転換させるために各教団別、そして個体教会の次元で生態環境運動が活性化すると同時に、エキュメニカル機関として社団法人である「韓国教会環境研究所」や「キリスト教環境運動連帯」が専門的で集中的な３種の事業を強化して行かなければならない。３種の核心的事業とは（1）地球及び韓国の信頼し得る「環境実態報告資料」の定期的発行、(2) 神学的省察と改善方向を提示する学術的研究及び大衆化事業、そして（3）具体的な実践課題の発掘と生活信仰指針書の提供（例: 生態界管理、健康と食物管理、生活の中の熱エネルギー管理、資源再活用管理、国家予算編成及び執行における反生態的な開発政策と言論弘報の監視等々）の三つである。

＜文献＞

7 例えば、大韓キリスト教書会（ソウル）から企画シリーズとして出版された次のような文献がある。金成烈『キリスト教信仰とカオス理論』（2005 年）；李正培『キリスト教と自然神学』（2005 年）；金均鎭・申ズンホ共著『キリスト教神学と自然科学の対話』（2004）；韓国組織神学会編纂『科学と神学の対話』（2003）；モルトマン著、金均鎭訳『科学と知恵』（2003 年）；金フブヨン著『現代科学とキリスト教』（2006 年）；金均鎭著『生態学の危機と神学』（1991 年）。

8 韓国教会環境研究所編『現代生態神学者の神学と倫理』大韓キリスト教書会、2006 年。

9 金愛英「ローズマリー・リューサーのエコフェミニスト神学」、『現代生態神学者の神学と倫理』大韓キリスト教書会、2006 年、pp.139-141 からの引用。

10 Rosemary Radford Ruether、田賢植訳『ガイアと神――地球治癒のためのエコフェミニスト神学』（梨花女大出版部、2000 年）;Sallie McFague、鄭愛星訳『隠喩神学――宗教言語と神のモデル』（茶山文房、2001 年）; Sallie McFague、金俊宇訳『気候変化と神学の再構成』（韓国キリスト教研究所、2009）。リューサーとマクフェイグに関する研究論文は韓国フェミニスト神学者たちによって多数発表されているが、金愛英と具ミジョンの次の論文をその代表的なものとして紹介したい。金愛英「ローズマリー・リューサーのエコフェミニスト神学」、韓国教会環境研究所編『現代生態神学者の神学と倫理』大韓キリスト教書会、200 年 6、127-153 ページ。;具ミジョン、「サリー・マクフェイグのエコフェミニスト神学」、論文集『現代生態神学者の神学と倫理』、77-102 ページ。

23 金在俊『金在俊全集』第 1 巻、ｐ．159。

24 張会翼『生と全（オン）生命:新しい科学文化の模索』ソル出版社、1998 年。

26 過去 25 年間、開拓的な情熱で荒れ地のような自然神学・科学神学・生態学的神学に関する研究論著が頻繁に出版された。筆者の書斎に数えられている資料だけを列挙しても次の通りである。金均鎭『生態学の危機と神学』（大韓キリスト教書会、1991 年）、李正培『生態学と神学』（鐘路書籍、1993 年）『韓国的生命神学』（図書出版監神、1996 年）『神学の生命化、神学の霊性化』（大韓キリスト教書会、1999 年）、朴在淳『韓国生命神学の摸索』（韓国神学研究所、2000 年）、金愛英『フェミニスト神学の主題探究』（韓神大学校出版部、2003 年）、 李正培『キリスト教自然神学』（大韓キリスト教書会、2005 年）、 姜声悦『キリスト教信仰とカオス理論』（大韓キリスト教書会、2005 年）、 金フビョン『現代科学とキリスト教』（大韓キリスト教書会、2006 年）、 梁在成、成ベックゴル『神・自然・人』（ハンドル出版社、2006 年）、李恩選『忘れてしまった超越を捜して』（図書出版モシヌン人々、2008 年）、金均鎭教授還暦記念文集刊行委員会『生命神学・生態神学』（ハンドル出版社、2004 年）、韓国教会環境研究所編『現代生態神学者の神学と倫理』（大韓キリスト教書会、2006 年）、李正培『ケン・ウィルバー（Ken Wilber）と神学――ホルアキ（Horachy）的宇宙論とキリスト教の出会い』（詩と真実、2008 年）。